

神無月

十月は「神無月」と呼ばれます。一方で出雲地方（島根県）では「神在月」と言い、全国各地から多くの神々が集まるとされています。故に島根県簸川郡の出雲大社では、数多くの神事が執り行われます。旧暦の十月十日、まず国譲りの聖地である稲佐浜において、その後出雲大社神楽殿において「神迎祭」が執り行われます。それ以降同月十七日までの七日間、「神在祭」が厳粛に執り行われます。十七日夜には神送りをを行い、神職が周囲を白綿布で隠して神々を送ります。この神送りを「神等去出祭」と言います。

この祭事の期間、神々の会議や宿泊に粗相があつてはならないというので、土地の人々は歌舞や楽器演奏などを設けず、家の建築なども行わず、ひたすら静粛を保つことを旨とすることから、神在祭は別名「御忌祭」とも言われています。

この出雲大社の神在祭が終わると、引き続き同県八束郡の佐太神社においても神在祭が執り行われます。その後、旧暦十月二十六日に同県簸川郡の万九千神社より神々はそれぞれの国に還られると言います。故に出雲大社では旧暦十月十七日と二十六日の両度にわたる神等去出祭を執り行います。十七日は大社からお立ちになる日、二十六日は出雲の国を去り給う日ということです。

さて、この神無月についてはこの他に諸説あります。例えば、十月は雷の鳴らなくなる月であることから「雷無し月」の意味だとする江戸時代の国学者荷田春満の説や、翌月十一月に行われる新嘗祭の準備として、新米で酒を醸す月、つまり「醸成月」の意味だとする説等もあります。ここで注目したいのが、神無月の「無」を「の」と解して「神の月」、つまり神祭りの月の意味だとする説です。同じ「無」という字は、六月の水無月にも使われています。その由来には諸説あり、文字通り、水が涸れてなくなる月、また田植が終わって田んぼに水を張る必要のある月「水張月」、そして、水無月の「無」は「の」という意味の連体助詞「な」であり「水の月」であるとする説などがあります。

実際日本では、この時期に水（雨）はどのような状況なのでしょう。梅雨の平均期間として、例えば東海地方では、梅雨入りが六月八日、梅雨明け七月二十日であり、旧暦六月もこの梅雨の平均期間に当てはまります。故に六月は「水が無い」ということはあり得ません。つまり、水無月は「水無し月」ではなく、「水の月」であることが濃厚ではないでしょう。同様に神無月も「神無し月」ではなく「神の月」と解釈されるのが妥当ではないでしょうか。

実際に、十月は伊勢神宮の神嘗祭を始め、全国各地の神社において、秋祭りが盛んに行われる時期です。出雲の地に集まることで、全国各地に於いて神々が不在となるようなことは有り得ません。神は此処にいて、彼処にいない、というような存在ではなく、此処にも、彼処にも、何処にも常におられる存在なのです。

【参考資料】

神道事典 國學院大學日本文化研究所

出雲大社HP <http://www.izunoooyashiro.or.jp/>